

Vajropamasamādhī の考察

渡 辺 章 悟

筆者はすでにヴァジュラ (vajra) についての論攷を準備している¹⁾。そこでは、北欧やギリシャの thunderweapon, thunderstone といった稲妻 (lightening) の信仰を比較しながら、ヴェーダの宗教において、ヴァジュラはそもそも電撃と雷鳴といった自然現象のことで、これがインドラ神の武器とされたこと、さらにその破壊力が金剛杵として具体化され、仏教に受容される過程で「煩惱を破壊するもの」として〈内化〉される意義を論じた。

本稿はそれに続き、そのヴァジュラに喩えられる三昧 (vajropamasamādhī 金剛喩定) について説明しようとするものである。金剛喩定とは見道・修道の所断の煩惱を減尽し、解脱に至る最後の三昧であるが、その位置づけをめぐる、アビダルマでも論争のあった重要なテーマである。本稿ではこの三昧が大乗の修道論にいたって、どのように位置づけられるのかを、般若経を中心として考察する。最初に、パーリ仏典に見られる類似の語句から検討してみたい²⁾。

1. 金剛に喩えられる心を持った人 (vajirūpamacitto puggalo) と金剛喩定 (vajropamasamādhī-)

パーリ仏典には金剛喩定 (vajirūpamasamādhī-) という用例はないが、『増支部』[PTS, AN1-124, 20-26] には、金剛に喩えられる心 (vajropamasamādhī-) に関わる非常に重要な教説がある。そこでは、人を三種に区分して仏説の重要性を説く。

およそ世の中には、爛傷に喩えられる心を持った人 (arukūpamacitto puggalo)、稲光に喩えられる心を持った人 (vijjūpamacitto puggalo)、金剛に喩えられる心を持った人 (vajirūpamacitto puggalo) の三種がある。この中で第一の「爛傷に喩えられる心を持った人」は怒りやすい世俗の人、第二の「稲光 (電光) に喩えられる心を持った人」は仏道に入った出家者、第三の「金剛に喩えられる心を持った人」は、修行の最終段階をむかえた出家者である。このうち第二「稲光 (vijju) に喩えられる心を持った人」とは、眼ある人がその明かりが闇夜を照らすとき物を見るよ

うに、苦等の四諦を如實に知るといふ。この次に、第三「金剛に喩えられる心を持った人」(vajirūpamacitto puggalo) を説くのである。

「金剛に喩えられる心を持つ人 (vajirūpamacitto puggalo) とはいかなる者か。比丘たちよ、ある人が漏を尽くして、無漏なる心解脱を、慧解脱を、まさにこの世において自ら実現し、体得し、完成しているとしよう。ちょうど、比丘たちよ、金剛は (vajirassa)、摩尼であれ、石であれ、砕くことができないものがあり得ないように、比丘たちよ、この人は漏を尽くして心解脱を、慧解脱を、まさにこの世において自ら実現し、体得し、完成しているのである。」

このように、「金剛に喩えられる心を持った人」とは、無漏の心解脱と慧解脱を現世において証知し、現証し、到達する人々のことであり、彼ら無漏の聖者の心を、金剛が他の宝石をよく摧断することになぞらえているのである。

ここでは金剛 (vajira) は摧破の力、あらゆるものを砕くという能動性を意味する。それが修行の階梯での決定的な場面、すなわち解脱という内的な変換で、自己の内部の煩惱を摧破することに喩えられるのであるから、vajira とはまさに摧破の象徴である。したがって、ここに vajirūpama-samādhī という語はないが、無漏の聖者が解脱直前に体験する、すべての煩惱を打ち砕く三昧 (金剛喩定) に関連することは明らかである。

なお、*Pudgala-paññatti*, (『人施設論』)³⁾ にも、この『増支部』の引用とほぼ同じ三種の心を持つ人の教説を見ることができるし、ここで論ぜられる三種の心のうち、第二の「稲光に喩えられる心を持った人」(vijjūpamacitto puggalo) と、第三の「金剛に喩えられる心を持った人」(vajirūpamacitto puggalo) という語は、解脱における三昧の局面で、しばしば並べられる重要な語句である。パーリ諸論書 (アビダルマ文献) の中で最も最初期に属する *Dhammasaṅgaṇi* (『法集論』)⁴⁾ では、以下のように定義されている。

「何が稲光に喩えられる (vijjūpamā) ダンマであるのか。下の三聖道における智慧 (hetthimesu tisu ariyamaggesu paññā), これらが稲光に喩えられるダンマである。何がヴァジャラに喩えられる (vajirūpamā) ダンマであるのか。上の阿羅漢道における智慧 (uparime arahattamagge paññā), これらがヴァジャラに喩えられるダンマである。」

このように「稲光のごとき〜」(vijjūpama-), 「金剛のごとき〜」(vajirūpama-) という二つの用語は、アビダルマの四沙門果中で無漏の最終の三昧として確立してゆく。室寺義仁氏によれば、特に『阿毘曇心論』を著した法勝が、アビダルマの教義解釈の中で、「見道」とそれに続く「修道」との明確な区分を意識して、「修

道」の最終段階にのみ、この金剛喩定を位置付けるという、新たな述語的価値付けを行った。さらに、現存する北伝アビダルマ諸論書の中で、修行者が最後の解脱に至る直前に入る三昧が金剛喩定であることを、初めて明記した文献は、旧訳六十卷『毘婆沙論』であり、その後の文献（『発智論』『大毘婆沙論』等）は、この制約の下でこの問題を論ずることになったと推定されている⁵⁾。

例えば『大毘婆沙論』では、「金剛喩定が現前するとき、煩惱は頓断する。その定が一切の惑を断ずるからである。そのために金剛喩定と名づけるのである。それは金剛が能く、鉄・石・牙・骨・貝・玉・末尼等を破するようなものである」⁶⁾という。金剛 (vajra) はすべてのものを断じ、破壊し、穿ち、摧破する力であるが、それが「すべての煩惱を能く断つ、一切の煩惱の対治法」とされたのである。こうして、金剛は金剛喩定と言われることで、修道の極みとして位置づけられ、その断滅という働きは外敵から、煩惱という内敵へとむけられた。すなわち断滅のはたらきが〈内化された〉のである。

2. 初期大乘に見る金剛喩定 ―小品系般若経を中心として―

初期大乘を代表する『八千頌般若』には、金剛喩定について以下のような3つの関連表現を見出しうる⁷⁾。

- 1) vajropamaś...nāma samādhīḥ (金剛喩定 ; [Wogihara 1932: 941, 1.14])
- 2) vajropama-dharma-samatayā (金剛喩法平等 ; [Wogihara 1932: 986, 1.13])
- 3) vajropamo nāma samādhīḥ (金剛喩定 ; [Wogihara 1932: 987, 1.22])

第一の例はダルモードガタ (法上菩薩) の説法を聞いて、サダープラルディタ (常啼菩薩) に現前した 62 種類の三昧 (samādhī) の一つにあげられるものである。

第二と第三は、ダルモードガタ菩薩が般若波羅蜜の教説の一つとして、「金剛に喩えられるものが平等であることによって、般若波羅蜜も平等なものである」(vajropama-dharma-samatayā prajñāpāramitā-samātā) という説法をしたのを聞いて、サダープラルディタ菩薩が金剛喩定 (金剛三昧) を得たとする教説である。

『八千頌般若』に対応する小品系漢訳諸本は、①『道行般若経』(大正8, no.224)、②『大明度無極経』(大正8, no.225)、③『摩訶般若鈔経』(大正8, no.226)、④『小品般若波羅蜜経』(大正8, no.227)、⑤『大般若波羅蜜多経』「第四会」(大正7, no.220)、⑥『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多経』(大正8, no.228) の六種ある。

これらの六経典中、般若経最古訳の『道行』では、1) の対応箇所は「十方諸仏の三昧」⁸⁾とするのみで、三昧の具体的な名はない。また、2)、3) の三昧は

「六万の三昧門」⁹⁾ に対応すると思われるが、サンスクリット文とは大きく異なり、vajropama- samādhi- (金剛喩三昧) に対応する名称は見られない¹⁰⁾。『大明度』もほぼ同じ状況である。1) は「入見十方仏定」(504c6) とするのみで、2), 3) も六萬定門 (505c2) (507a1) といい、それぞれ 46 種、24 種の定の名称を記するが、金剛喩定は見あたらない。また、『鈔經』は第十三章以降を欠いており、ここに該当する章は存在しない。以上のように、小品系の古い漢訳には金剛喩定に対応する訳は見られない。

一方、翻訳が後の『小品』(408 年) と『仏母』(985 年) は、サンスクリット本とよく対応し、1), 2), 3) に対する訳語「如金剛三昧」「金剛喩三摩地」等を見ることが出来る¹¹⁾。つまり、サンスクリット本を含め、小品系の中でも成立、もしくは翻訳年代の新しい經典になると vajropama- samādhi- (如金剛三昧) の語が見られるようになると言えるのである。なお、『大般若』「第四会」の 1) 「心堅固踰於金剛」は他の訳とは異なり、むしろ vajropama-citta- の訳語と考えられる¹²⁾。また、2) と 3) は「常啼菩薩 (Sādāprarudita) 章」以下に見られるが、そもそもこれは「初会」を除いて『大般若經』には存在しない部分であるから、「第四会」には当然その定名はない。

以上が小品系に見られる vajropama-samādhi の用例のすべてである。ここには、後述するような金剛喩定の体系は見られない。さらに言えば、初期般若經の系統である小品系般若において、その初期形態では金剛喩定の伝統は確立していなかった。漢訳の状況から類推すると、おそらくそれは、般若經の発展の中で、次第に受容されたものと思われる。

3. 大品系般若經にみる金剛喩定

一方、小品系から発達した大品系になると、vajropama-samādhi の漢訳語(「金剛喩定」と「金剛喩三摩地」)は急増する。最大の般若經である「十六会」『大般若經』600 巻を例にして分析すると、「金剛喩定」は『大般若經』全体では 21 件、そのうち「第三会」までで 17 件(「第四会」「第五会」には見られない)で、「金剛喩三摩地」に至っては、全体で 28 件、「第三会」までに 27 件を数える¹³⁾。このような状況をみると、般若經では初期の小品系にはほとんど顧みられることのなかった金剛喩定 (vajropamasamādhi) という伝統的な行法が、大品系になって三昧がより重視される傾向の中で、新たにクローズアップされるようになったことが判る。

『大般若經』を除いた大品系般若には、「如金剛三昧」と「金剛三昧」を中心に

35 件の用例がある。このうち『大品』(no.223)は一貫して「如金剛三昧」とするが、『光讚』(no.222)は「金剛三昧」「金剛喩三昧」「金剛之喩三昧」「喩金剛」と一定せず、『放光』(no.221)は基本的には「金剛三昧」であるが、例外的に「如金剛三昧」(19b26)、あるいは「金剛部三昧」(23c14)とも訳す。なお、古訳では samādhī が「定」ではなく「三昧」とする点が共通する。

次にサンスクリット『二万五千頌般若』を中心に言えば、校訂出版が行われている第 7 章までに限っても、vajropama-samādhī の用例は 9 回で、未校訂の第 8 章の 2 回分 14 を合わせると、合計 11 回を数える。これらを用法から大別すると、以下のような 1) ～ 4) の四類型に分かれる。

- 1) 百八三昧などの三昧体系の一つ。[Dutt 1934: 118, 1; 142, 12; 172, 1; 198, 2]
- 2) 粉碎する vajra に喩えられた三昧 [Kimura 1986: 101, 4-10]
- 3) 如電光 (稲光) 三昧 (vidyutopama-samādhī) とともに用いられる三昧 [Watanabe 1991: 17, 11.4-6], [Watanabe 1993: 10, 11-12]
- 4) 菩薩が解脱直前に入る大乘の三昧 [Dutt 1934: 82, 7-11], [Kimura 1992: 153, 17-23], [Conze 1974: 102, 15; 117, 14-15]

第一 (4 例) は百八三昧を代表とした複数の三昧名に含まれるもので、これらはすべて『二万五千頌般若』第 1 章に属する。百八三昧のリストは二度記載されているが、それは、第一の「英雄的な行進と名づけられる三昧」(sūraṅgamo nāma samādhīḥ 首楞嚴三昧) から、最後の「虚空のように執著から離脱した無染と名づけられる三昧」(ākāśaṅgavimukti-nirupalepo nāma samādhīḥ 離著虚空不染三昧) である¹⁵⁾。そのサンスクリットと漢語訳の対照は、あまりに煩雑となるので省略するが、基本的には百八三昧の第 10 番目に金剛喩三昧 (vajropama-samādhī) が記載される¹⁶⁾。この法相化された三昧としての用法は、大乘の提唱する実践法として大品系般若で確立したものである。

第二は仏舎利供養と関連する箇所、金剛身が金剛心三摩地と関連して用いられ、第 2 章 (1 例) のみの例外的用法である¹⁷⁾。その箇所の文脈は、如来が仏舎利供養の甚だ大きいことを見通して、「金剛に喩えられる三昧に入って、金剛に喩えられる身体を粉々に断割して」(vajropamam samādhīḥ samāpadya ātmabhāvaṃ vajropamam bhittvā), その身体を芥子^{かろし}の実の粒ほど (sarṣapa-phala-mātrika) にする。これを供養し、恭敬し、無邊なる福德を得て、最終的に苦を滅尽するというものである。したがって、涅槃の直前に入る三昧が金剛三摩地である。

第三は第 7 章の 2 例であり、空・無相・無願の三三昧や如電三昧 (vidyutopama-

mādhi 電光喩定) の後に置かれる法相化された用例である。ただし、PV では「無間定に入って住し、電光喩定に入って住し、金剛喩定に入って、正等正覚に住する」([Watanabe 1991: 17, 4-6]) とある。このようにここでは「無間定」(ānantaryān samādhiṇ), 「電光喩定」(vidyutopamān samādhiṇ), 「金剛喩定」(vajropamaṇ samādhiṇ) という三つの三昧となっている。この内の、第一「無間定」は、アビダルマ論書において、金剛喩定と同置され、「金剛喩定が現前するとき、頓に三界の見惑・修惑の断滅を証する」¹⁸⁾と規定するのに沿ったものである。また、「電光(稲光)喩定」と「金剛喩定」は、前述したように、Dhammasaṅgaṇi 等のアビダルマで言及された、「下の三聖道」(=「電光(稲光)に喩えられる定」), 「上の阿羅漢道」(=「金剛に喩えられる定」), すなわち預流・一來・不還という三聖者の位と、最後の阿羅漢という四沙門果の伝統を保持しているのである¹⁹⁾。また samyaksambodhiṇ が金剛喩定と結びついているのも、金剛喩定を経過した段階を阿羅漢果とするアビダルマの規定に基づいたものであろう²⁰⁾。

ただし、漢訳においては「第三会」(715c11) は PV と同じく「如電光定・金剛喩定」の前に「無間定」を挿入しているが、他の漢訳には「無間定」は見られない²¹⁾。PV と「第三会」(715c10-12[715c19]) を対照させると、1. ānantaryān … samādhiṇ は「無間定」、2. vidyutopamāṇs … samādhiṇ は「定如電光定」に一致し、3. samyaksambodhiṇ vajropamaṇ ca samādhiṇ (正等正覚である金剛のような三昧) は「金剛喩定・聖正定」と二つの三昧と訳しているが、これは「第三会」の原文が samyaksambodhiṇ ではなく、samyaksamādhiṇ であった可能性が高い。この四種の三昧の形式は、二種類のチベット語²²⁾と、『一万八千頌般若』の対応箇所にも共通し ([Conze 1974:20, 11-13])、大品系における三昧の発展を跡づける。

第四は大乗の修道として位置づけられる無上正等正覚の直前の三昧である。この用例は最も多く、第1章、第5章の各1例、及び第8章の2例、合計4例がある。この類型に特有の文脈は、「一瞬に生ずる般若によって」(ekacitta[la]kṣaṇa-samāyuktayā prajñayā), すべての形相についての知 (sarvākārajñatā 一切相智) を得るという、極めて特徴のある解脱論を展開する。

基本形は、「菩薩摩訶薩は、菩提心が無間であり、金剛に喩えられる三昧に入って、一瞬に結びついた智慧により、すべての形相についての智(一切相智)に至る。如来の十力を具え、四つの無所畏、四つの無礙解、十八の特別な仏の特徴、大慈・大悲とを具える。」([Dutt 1934:82, 6-11]) というものであるが、第5章 [Kimura 1992:153, 19-23] では、「例えば阿羅漢がすべての道を学んで正性決定の位 (samyak-

nyāma) に入る。しかし、[阿羅漢という] 結果の道に生じない限り、[仏] 果には至らない。全く同じように、スプーティよ、菩薩摩訶薩はすべての道に生じ、菩薩の確定した状態 (bodhisattva-nyāma) に入る。しかし、金剛のような三昧 (金剛喩定) を獲得しない限り、すべての形相についての知 (一切相智) に至らない。それ (金剛喩定) から、かの一相と結合した般若 (一刹那相応般若) (Cf.[渡辺 2003]) によって、すべての形相についての智 (一切相智) に至る」とする。こうして、金剛喩定という一瞬の三昧を経過して、「一刹那に結びついた諸法を知る般若」が生まれ、この瞬間を境として菩薩は仏となる。この一瞬の智慧によって、一切の形象を知る智慧 (sarvākārajñatā 一切相智性) が獲得され、ブツダの知的レベルに達する。これに伴い、すべての習慣性の煩惱は完全に断滅し、その聖者には、十八不共仏法をはじめとするブツダの属性が備わり、無上なる正等正覚に至るという大乘の解脱論が構築されたのである。

4. まとめ

この悟りへの階梯をアビダルマのそれと比較すると、非常に良く対応していることがわかる。例えばヴァスバンドウの「最終解脱直前の最後の“無間道”が金剛喩定であり、その金剛喩定によって、一切の煩惱を断ち尽くして、尽智 (kṣaya-jñāna) が同時瞬間的に生じ、次の瞬間には最後の“解脱道”へと入る。したがって、金剛喩定は“尽智”と“一切の漏尽” (sarvāśrava-kṣaya) ととともに瞬時に結果するものである」[室寺 2000: 112] という解脱論に対し、般若経では、阿羅漢の「正性決定」(samyaknyāma) に対して「菩薩の決定」(bodhisattvanyāma)、「無間道」に対して「無間定」(ānantaryān samādhin), 金剛喩定の中で生ずる一瞬の智慧である「尽智」に対して「一刹那相応の智」(ekalīkṣaṇa-samāyuktā- prajñā-) とする。ここで明らかなように、大乘仏教はアビダルマの解脱道論に基づきながら、金剛喩定を介して、阿羅漢道の後に続く菩薩の修行道を構築したのである。

[本稿は、平成 15—18 年度科学研究費補助金・基盤研究 B (2)「大乘仏教の起源と実態に関する総合的研究」の研究成果の一部である。]

【略号】

[室寺 2000]: 室寺義仁「金剛喩定について」(『高野山大学密教文化研究所紀要』別冊 2, 2000, pp.89-118.

[渡辺 2003]: 渡辺章悟「悟りへの一瞬の智慧」『仏教の修行法 阿部慈園博士追悼論集』

- 春秋社, 2003.1, pp.153-175.
- [Conze 1974]: E. Conze ed., *The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā Chapters 70 to 82*, Serie Orientale Roma XL VI, IsMEO:Roma, 1974.
- [Dutt 1934]: Nalinaksha Dutt ed., *The Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Calcutta Oriental Series, no.28, Luzac & Co.:London, 1934.
- [Kimura 1986]: Takayasu Kimura ed., *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (二万五千頌般若) II・III, Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd.:Tokyo, 1986.
- [Kimura 1992]: Takayasu Kimura ed., *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (二万五千頌般若) V, Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd.:Tokyo, 1992.
- [Ruegg 1989]: Ruegg, David Seyfort, *Buddha-nature, Mind and the Problem of Gradualism in a Comparative Perspective*, London, 1989.
- [Watanabe 1991]: WATANABE Shogo ed., “Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā VII -1,” 『東洋大学大学院紀要』第 27 集, 1991.2, pp.1-20.
- [Watanabe 1993]: WATANABE Shogo ed., “Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā VII -2,” 『東洋大学大学院紀要』第 29 集, 1993.2, pp.1-16.
- [Wogihara 1932]: U. Wogihara, *Abhisamayālaṃkāṛāloka Prajñāpāramitāvyākhyā*, The Work of Haribhadra, Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd.:Tokyo, 1973 (1st Pub., 1932).

- 1) 拙稿「vajra 考」『東洋学論叢』第 31 号 (『東洋大学文学部紀要』第 59 集, インド哲学科篇) 2006.3 (刊行予定).
- 2) なお, 漢訳四阿含中では『増一阿含經』に 10 例の「金剛三昧」の用例がある.
- 3) *Puggala-pannatti* (PTS Abhidhamma 4, 30) (『南伝大藏經』第 47 卷, pp.401-402).
- 4) *Dhammasaṅgani* (PTS Dhs 226-227) の引用については, すでに [室寺 2000:89-118, esp. pp.98-99] が指摘している. 筆者はうかつにも IBU における学会発表時まで, 室寺氏の論文が公刊されていることを知らずにいた. 室寺論文によれば, Erich Frauwallner, *Abhidharma-Studien*, (WZKS(O)15/1971, S.69-102;eps., pp.96-97) でも指摘されている.
- 5) 『阿毘曇毘婆沙論』(大正 28, no.1546, 111a17-111a25). 詳細は [室寺 2000:99; 103-107] を参照されたい.
- 6) 『阿毘達磨大毘婆沙論』(大正 27, no.1545, 264c21-265a1).
- 7) ただし, [室寺 2000: 100-101, note 12] は, [Ruegg 1989, 167, note 336] の研究にしたがって, 「金剛喻定」という術語そのものが初めて仏教文献に現れるのは, 『二万五千頌般若經』からであるとする.
- 8) 『道行般若經』(大正 8, no.224, 472a9).
- 9) 『道行般若經』(473c26, 476a29).
- 10) サンスクリット文では六百万の三昧門 (saṣṭiḥ samādhi-mukha-śata-sahasrāṇi) とする. Cf. [Wogihara 1932: 987, 1.27].
- 11) 『小品般若』(大正 8, no.227: 581c5, 586a19, b2), 『仏母出生經』(大正 8, no.228: 670a20, 676a6, a21)
- 12) 『大般若』「第四会」(大正 7, no.220: 826b14, 828b12, 852b25).

- 13) 『大般若経』の「金剛喻」83件の内訳を見ると、金剛喻定(20件)、金剛喻三摩地(28件)、金剛喻等持(2件)、金剛喻平等(1件)、金剛喻平等三摩地(1件)のように、三昧(定)に関連する語がほとんどで、それ以外にも金剛喻心(12件)、金剛喻智(18件)、金剛等持(1件)など定の関連語でしめられている。
- 14) PV 第8章はサンスクリット本が公刊されていないので、最も近い内容を持つ『一万八千頌般若』[Conze 1974]を使用した。Cf.[Conze 1974: 102, 15; 117, 14-15].
- 15) PV [Dutt 1934: 142, 1.7-144, 1.4; 198, 11.11-203, 11.21]. ただし、[Dutt 1934: 172, 1.1]では最初が *vajropama-samādhau sthitvā yāvad ākāśaṅgavimuktinirupalepasamādhau sthitvā* とする。玄奘訳『大般若経』は最初を「健行三摩地」、最後を「無染著如虚空三摩地」と訳し、『大品』では最初を「首楞嚴三昧」、最後を「離著虚空不染三昧」、『光讚』は最初を「首楞嚴三昧」、最後を「脱虚空蔵滅護三昧」と訳す。しかし、『放光』は、最初は「首楞嚴三昧」と一致するが、最後は「必入辯才三昧」であり、対応しない。
- 16) ただし、羅什訳では第10の三昧は「金剛三昧」とし、これとは別に第49の三昧として「如金剛三昧」を加えている。また、玄奘(「第二会」)は、この法相化した三昧を意味するときのみ「金剛喻定」ではなく、他の三摩地(samādhī)と同じく「金剛喻三摩地」と訳し分けている。
- 17) 『放光』(53c23-27); 『大品』(293b3-10); 「第二会」(165b28-165c7)。なお、初期仏教では僅かではあるが、仏の身体として金剛身が言われることもあるが、もちろん三昧と結びつけて説かれてはいない。Cf.『長阿含経』(大正1, no.1, 27b12); 『雑阿含経』(大正2, no.99, 167b3)。
- 18) 『阿毘達磨発智論』(T26, 992b22-24)。『大毘婆沙論』(T27, 142c4)。
- 19) もう一つの用例[Watanabe 1993: 10, 11-12]は、*vidyutopamañ ca samādhim* と *vajropamañ ca samādhim* の二定とするが、これに対応する漢訳(『放光』124c20-21; 『大品』391b10; 『第二会』366b21-22)は「聖正三昧(聖正三摩地, 直[麗:真]禪三昧)」を加えた三種の定を並記している。
- 20) 『大毘婆沙論』(T27, 175c14-15)「金剛喻定現在前時, 通得三界見修所断断, 為阿羅漢果。」; 『阿毘曇毘婆沙』(T28, 242a18-21)「実義智者, 是金剛喻定。断是彼果, 所以者何。得阿羅漢果時, 以金剛喻定, 断三界見道修道所断结, 顿証解脱故。」ただし、般若經典ではこれは大乘菩薩の修行階梯であるために、阿羅漢果とは言わず、三智等に結びつけるのである。
- 21) 『放光』(123a27-28), 『大品』(389a17-20), 「第二会」(362b27-29)。
- 22) 「1. 無間の三昧に入るとどまる。2. 電光(稲光)のような三昧, 3. 正しい三昧, 4. 金剛のような三昧に入るとどまる」*bar chad med pa'i ting nge 'dsin la nye bar bsgrubs te gnas so. glog lta bu'i ting nge 'dsin dang, yang dag pa'i ting nge 'dsin dang, rdo rje bu'i ting nge 'dsin la nye bar bsgrubs te gnas so.* (PV Tib. Trs. No.731, vol.19, Di 95b8-96a1), (PV Tib. Trs. No. 5188, vol.89, Ca 242b5-6)

〈キーワード〉 金剛, 三昧, 百八三昧, 無間定, 解脱道論, 一刹那相応般若

(東洋大学教授, 博士(文学))

ceeded towards Awakening (*bodhau sampratiṣṭhāti*). Then they called themselves “sentient beings (*sattva*) who seek for *bodhi*” i.e., *bodhisattva*, and with this consciousness they entered into the way of practice of monks. And this is the beginning of Mahāyāna Buddhism.

63. A Consideration of the “Concentration Compared to a *Vajra*” (*Vajropamasamādhi*)

Shōgo WATANABE

In the Vedic religion, the word *vajra* originally referred to natural phenomena, that is, lightning or thunderbolts, and it was considered to be a weapon of the god Indra. Later, when it was incorporated into Buddhism, its destructive power took the concrete form of a pestle and was internalized as the “destruction of worldly desires.” In Abhidharma Buddhism, the destructive power of the *vajra* was likened to the power of *samādhi* and called the “concentration compared to a *vajra*” (*vajropamasamādhi* 金剛喩定), and was defined as the concentration of an instant experienced immediately before the ultimate stage of deliverance. In other words, this concentration destroys the worldly desires that need to be severed in the stage of intellectual practice (*darśana-mārga* 見道) and spiritual practice (*bhāvanā-mārga* 修道), and it is the final concentration on the path leading to deliverance. In the theory of practice in the Mahāyāna, this concentration is reconstructed as the practice of the bodhisattva (*bodhisattvacaryā*). When one analyzes its development on the basis of the Prajñāpāramitā Sūtras, in which it was systematized for the first time in the Mahāyāna, it becomes clear that its structure is such that when a bodhisattva confirmed as having reached the stage of bodhisattva (*bodhisattva-nyāma*) enters into the *vajropamasamādhi*, the “intelligence of a single instant” (*eka[la]kṣaṇa-samayuktā prajñā-*) arises in his concentration, followed by the “intelligence of all-knowing” (*sarvākārajñātā*) through that intelligence.